

見張り塔から

メディアの今



専修大教授・山田健太さん

山本幸三地方創生大臣の「一番の関は文化学芸員とされる人たち。一掃しなければ駄目だ」(4月16日)の発言は、単に学芸員の仕事について知らなかっただけではなく、そもそも博物館の機能について社会全体の理解がないことの表れだ。

博物館というメディアは、多様な表現の発露の場であり、そこにおける資料の収集・保管・展示・研究は、その自由が担保されている必要がある。しかし実際には近年、作品展示に対して撤去などを求める事態が続いている。圧力をかける側は、これらが「許される」と思っている節

があるところだ。そこには二つの誤解が存在しているように見える。

一つは、運営主体が公共団体である場合、博物館や美術館の職員は館長も含め公務員もしくはそれに準ずる職である場合が多く、それゆえにいは上司である国や自治体の意向のもとにあるべきだとの思い込みだ。しかし、学芸員はその職務を自主独立に行うべきで、初めて専門職としての機能を発揮することができるとする。その際に収集や研究、展示の段階で、その自由が奪われたのでは、自

博物館の自由は文化の礎

守れ 表現発露の場

らの職は全うできない。

次に、作品の発表の自由は作家に保障されているのであり、展示はあくまでもその意向のもとにあるべきだとの思い込みだ。しかし、学芸員はその職務を自主独立に行うべきで、初めて専門職としての機能を発揮することができるとする。その際に収集や研究、展示の段階で、その自由が奪われたのでは、自

下に置かれる傾向がある。さらに、頒布は、子どもの保護などを名目に長く一定の制限を認めてきた歴史がある。しかし、あくまでもそれは例外的措置でなくてはならず、しかも出版物と違って作品が美術館で展示されないというこ

かし」との声が上がりつら

い状況にもつながっている。学芸員が政府あるいは自治体の意を汲んで活動していないと指摘され、それに対し現場の努力が理解されておらず残念だとして事態を收拾することは、新聞記者が政府への

とは、一般市民にとって鑑賞の機会を奪われることになり、重大な表現侵害行為だ。しかも問題を複雑化しているのは、学芸員が作品撤去を求めると、規制の側に回るものが少なからずあることだ。運営者側とともに、学芸員の側の問題も見過ごせないということになる。それは同時に、問題が発生しても「お

協力が足りないと言われたのに対し、こんなには度々しているのにと答えるに等しいものということになる。日本は類似施設も含め六千館近い博物館・大国にもかかわらず、過去の富山県立近代美術館の判例(二〇〇〇年十月二十七日最高裁判決)も、市中の議論でも、博物館の自由については未成熟だ。同じよ

博物館の自由を巡るトピック

- 2014・2・16 東京都美術館「現代日本彫刻作家展」で、中垣克久の作品「時代の肖像」中の首相の靖国参拝を批判する文言が「政治的な宣伝になりかねない」として作品撤去を要請を受け、表現の一部を削除
- 8・12 愛知県美術館「これからの写真」展で、鷹野隆大の男性ヌードを扱った作品がわいせつ物陳列にあたることとして警察による作品12点の撤去指導。鑑賞制限などの事前措置に加え、換装を回避するため下腹部に布をかけるなどの対応
- 15・7・25 東京都現代美術館
- 16・3・5 東京都現代美術館「MOTアニュアル2016 キセインノセイキ」で、橋本聡の作品(前年の会田誠の作品)撤去問題を取り上げたもの)に対し、抗議・自粛要請があり展示中止
- 17・4・22 群馬県立近代美術館「群馬の美術2017」で、白川昌生の群馬朝鮮人強制連行追悼碑をモチーフとした作品が、県が係争中の碑であるとして館の指導で開館前に解体撤去

うな公営の立場にある公共図書館も、選書や配架に関してさまざまな軋轢の歴史を持つ。そうした中で図書館の自由に関する宣言を有し表現の自由を守ってきた。多様な豊かな展示・研究が実践

され、文化の発展に寄与する(博物館法)ためにも、問題が生じた場合に博物館自身や個々の学芸員が拠って立つことができるような、博物館の自由の明文化が急がれる。(毎月第二火曜日掲載)

日々論々

被災ペット

東日本大震災と福島第一原発の事故で避難を続ける人は、福島県だけでもまだ七万人もいる。あの日、人と同じく行き場を失ったペットの犬や猫たちは六年の歳月をどう生きたのだろうか。被災動物を保護している施設を訪ねた。

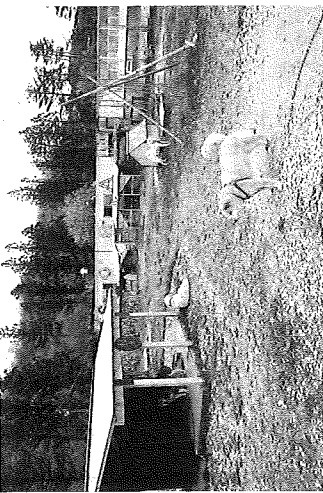
福島市郊外、吾妻山の麓の小高い丘の上にNPO法人「SORAアニマルシェルター」が運営する施設がある。約六千坪の敷地の中に手作りの犬舎や猫のおりが点在し、鳴き声にきやがだ。

福島県浪江町で保護した子犬におやつをあげる 陸堂さん(いずれも福島市で)



「無人の町を放浪している犬が何匹もいました。そんな

SORAアニマルシェルターの施設で新たな飼い主を待つ犬たち



間、ここで暮らしている。当初は子宮に病気があり、ろく

特徴があるという。

「広い家の庭先で番犬として飼われていたのが、よくほえます。人員知りずる子も多い。つらい経験をしてきているのかなと想像します」

そんなペットたちに、新たな飼い主を見つけたいのが、一陸堂さんたちの当面の目標だ。

毎月第二日曜日に説明会を開催し、希望者は犬を引き合われる。最低でも数回はボランティアに通ってもらい、犬との相性や飼い主がどれほど本気であるかなどを確かめる。青い「親子」の母子

東北 復興日記



▶▶▶ 217

小高を応援する会3B+1 廣畑裕子さん

東日本大震災から六年が過ぎました。第二次世界大戦終結から六年後の一九五二年はどんな感じだったでしょうか。戦争を知らない私ですが、何も無くなった終戦から六年が、まだい時だつたこと

指が解除され、普通に暮らせるようになりました。しかし、まだ何も進んでいません。震災前、一五千人弱だった人口は、今年三月時点で千二百人と十分の一程度。今後の生活環境をどう作り出していくのかが、大きな課題です。震災で破損した家屋が放置されて修復できなくなり、住宅や店舗が次々と取り壊されています。新たに事業を始めようとする人や、事業を再開しようとする人は、増える物事が多いのです。